



## ～エイズ対策に携わる青年海外協力隊～

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 青年海外協力隊事務局 籠田 綾

独立行政法人国際協力機構 (JICA) は、日本の国際貢献の重要な柱である政府開発援助 (ODA) を一元的に行う機関として、開発途上国への国際協力を行っている。「すべての人々が恩恵を受けるダイナミックな開発」というビジョンのもと、世界約 100カ所の拠点を窓口にして世界 150カ国以上の国と地域で事業を展開。各国事情にあわせて、人材育成からインフラストラクチャー整備まで幅広い分野において、開発途上国が抱える課題解決を支援している。そのなかでも、青年海外協力隊派遣をはじめとするボランティア事業は 1965 年に開始され、これまで 122カ国に 4 万人を超えるボランティアを派遣してきた。現在も、3325 名 (2010 年 8 月 30 日時点) の JICA ボランティアが世界 85カ国で活動している。

「アフリカの健康、水、いのち」というテーマは、HIV/エイズをなくしては語れない。世界各地、特にアフリカで人々の生活に大きく影響している HIV/エイズは、国際社会や各国政府、市民社会による様々な取り組みにより、UNAIDS の “GLOBAL REPORT” (注 1) によると新規 HIV 感染が 1999 年以降 19% 減少するという一定の成果も見られるものの「HIV/エイズの蔓延を 2015 年までに食い止め、その後減少させる」という MDGs (ミレニアム開発目標) (注 2) 達成が難しいとされる国もあり、国際社会が掲げたエイズ治療・ケア・予防への普遍的アクセスという目標も達成されないままである。そして何より、HIV は今も人々の生活と共にあり、その影響を受けている人々がいる。

JICA はこうした現状を少しでも改善すべく様々な協力を行っており、その一環としてエイズ対策に携わる青年海外協力隊派遣も行っている。HIV/エイズは貧困、ジェンダー・セクシュアリティ、経済、文化等と複雑に関わるため、それに対するアプローチも一様ではない。そのため、「エイズ対

策」職種として直接予防啓発にかかわるだけではなく、エイズによって孤児になった子供たちのサポートを行ったり (「養護」職種)、HIV に関わるデータや統計の整理を行ったり (「PC インストラクター」職種) するなど、様々な側面からエイズ対策に携わっている協力隊員がいる。

人々の健康、そしていのちに影響を与えている HIV/エイズの現状について、その国の人々と共に暮らす協力隊員は何を感じ、どのような活動を行っているか、2 年間の活動を終えた 2 名の文章を通じ少しでも知っていただき、アフリカ各国の人々、そしてそこで活動する協力隊員たちに思いを馳せていただければ幸いである。

(注 1)

[http://www.unaids.org/globalreport/documents/20101123\\_GlobalReport\\_full\\_en.pdf](http://www.unaids.org/globalreport/documents/20101123_GlobalReport_full_en.pdf)

(注 2)

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/doukou/mdgs.html>

## モザンビーク共和国

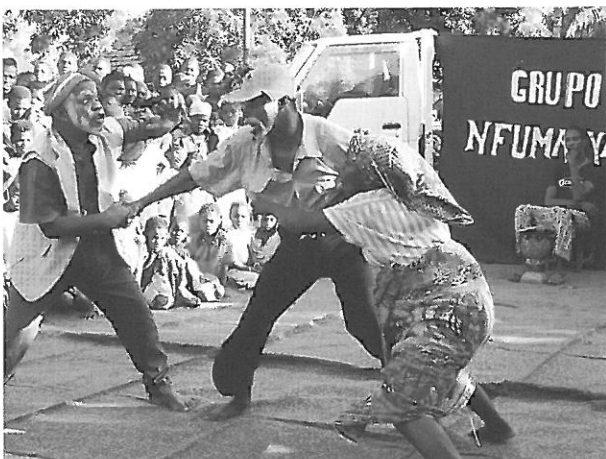
平成 20 年度 モザンビーク共和国派遣  
大町 佳代 (青少年活動)



Kayo OMATHI

1980 年 兵庫県生まれ  
2006 年 関西学院大学社会学部社会福祉学科卒業  
幼稚園教諭、保育士、社会福祉主事  
聖和大学短期大学部保育科卒業後、関西学院大学社会学部社会福祉学科に編入し、ソーシャルワークを学ぶ。在学中に2年間休学し、カンボジアにて活動している NGO にて現地常駐スタッフとして活動。卒業後、モザンビークにて活動している NGO に所属し HIV/AIDS のプロジェクトにて1年間活動後、青年海外協力隊として、再びモザンビークにて2年間活動。現在、国際協力分野での就職が内定。

ポルトガルからの独立後も 17 年にもわたる長い内戦を乗り越え、今ようやく復興から開発への道を歩んでいる国、モザンビーク。少しずつ国の発展へ向けて立ち上がっていくかのように見えた国に新たな問題が立ちはだかった。内戦終結後、経済や商業の発展に伴い国内外の人々の移動が活発になってきたことにより国道沿いを走るトラックの運転手・売春婦・主要な輸送路の近くに住民の間で、また、地域に根付いた伝統的医療の現場で、HIV/エイズの流行が深刻になっている。2010 年の時点で、同国における 15-49 歳の HIV 感染率は 11.5%とされており、全人口では、約 150 万人に達したとも言われている。



エイズにおける差別をなくす為の啓発

私は、モザンビークの首都マプトから 1600km 離れたザンベジア州に赴任し、町の文化センターにて女性の地位向上や青少年の情操教育を目的に様々な活動を行ってきた。赴任当初、配属先からの要請は理論を中心とした音楽の市民向け授業を外部講師とともに開催することであった。しかし、彼らの日常に根付いている伝統ダンスに注目し、ザンベジア州に先祖代々残っている伝統ダンス・リズムを利用した青少年の伝統ダンスグループを立ち上げ、バス停・市場・学校・病院・保健所など人々が集まりやすい場所で踊りと劇を用い、HIV/エイズ・マラリア・衛生教育・家庭内暴力・ドラッグなどをテーマとしたありとあらゆる予防啓発活動を行うようになった。



コンドームの使用方法を実演するダンスグループのメンバーと協力隊員 (左端が筆者)

設立目的は、伝統ダンスをただの余暇のものに終わらせず、情報が行き届かない地方や現地語しか話すことができない人たちにも、伝統ダンス・太鼓のリズム・歌唱を通し、必要な知識・メッセージを伝えていくことで今後の国の開発に少しでも貢献できるものに育てていくことであった。

年齢も生活環境も異なる若者と共に、「予防」という枠の中で人々にすでに根づいている習慣を変える「人の行動変容」の部分に拘り、コミュニティの中でメッセージを発信し続けてきたことで培った忍耐力と発想力、また彼らから得たエネルギーは、はかりしれない。チームの中で人間対人間の信頼を築きあげていく中でモチベーションを高め、自分一人ではどうにもならないことも周囲の人々を巻き込み影響を与えていくことで結果がおのず

と変わってくることを彼らと共に日々学んだ。

数々の公演の中でも、橋梁建設の現場で働いているワーカーへのHIV/エイズ予防啓発活動をテレビやラジオなどのメディアの協力を得て地域に発信したケースでは、グループのプロモーションにもつながり、市民に大きなインパクトを与えた。



村の中での啓発活動

踊ることは生きること。手足を伸ばし、空を仰ぎ、太鼓のリズムパーカッションにのせて自分が生きていることを体でめいっぱい表現する。その上でいかにメッセージ性をもった劇内容を盛り込んでいくか。モザンビークに生まれ育ってきた彼らだからこそ、彼らの目線において、国の現実や問題と向き合いながらひとつひとつのテーマに沿った振り付けができていく。表現していく中で重要となってくるのは、いかに一人の人のメンタリティの中に入り込めるか。それが見ている人々の深い胸の奥の部分揺さぶり、自分たちだけで公演するのではなく、観客として見ている市民もともに一体になって参加できる空気を創り上げる。まるで人々が魔法にかけられたようである。

また、伝統ダンスグループとの活動の傍らザンベジア州に残る伝統ダンス調査を配属先の同僚と共に行い、本・DVD・CDとして残すことができた。

世代交代につれ、踊りの中には絶滅に瀕している種もある。これらの無形文化財を後の世代に引き継いでいく為に目に見える形で残す視覚教材を作成し、全国の図書館・文化センター・教育文化省などに配備し、一般市民がいつでも見ることができるようになることが目的だった。伝統ダンスの調査は、活動計画・調査・執筆活動・CD・

DVD編集作業・製本作業などの期間を考えると、2年間がかりの活動であった。収録してきた貴重な歌唱や伝統ダンス、リズム、各伝統ダンスの太鼓のリズムの叩き方、そして伝統ダンスを先祖から引き継いでいる人々のインタビューシーンなどは、ザンベジア州の文化を他州に紹介する意味でも役立てることができ、またモザンビークの伝統ダンスグループ、その他のアーティストにとっても、有効に活用することができる。



伝統ダンスグループのメンバー

地方での調査中、予想だにしないことがおこったり、交通の不便の為やむを得ず引き返したり、気の遠くなるような道のりであったが、旅の間中生活のすべてを共にしながら過ごした同僚たちとの密な時間は、なにものにも変え難い大切な時間であったと言える。彼らの人生観・世界観・生活観・文化観・家族観を、普段は話をしない深いところまでいろんな角度から本音で話すことができたことで、彼らも日本で生まれ育ち現在自分たちと共に働いてしている私という存在を、同僚としてありのまま受け入れてくれるようになった。

自分のいのちを生きるということ。彼らから学んだメッセージを胸に、今日もモザンビークで踊り続ける彼らとともにこの国の豊かな未来を願い続ける。

## ガーナ・若者の行動変容に向けた HIV/AIDS 予防啓発手法

平成 20 年度 ガーナ共和国派遣  
白 井 美 穂 (エイズ対策)



Mio SHIRAI

1981 年 神奈川県生まれ  
2003 年 明治学院大学卒業  
2003-2005 株式会社イトーヨーカ堂  
(2006.1月-7月 タイのエイズ孤児ケ  
ア施設でボランティア活動)  
2006.10月-2008 年 9 月  
財団法人 横浜 YMCA 国際・地域担当  
2008.10月-2011 年 1 月  
派遣前訓練・ガーナへ派遣  
現在、財団法人 横浜 YMCA 横浜 AIDS  
市民活動センター (横浜市より運営を受  
託) センター長

西部アフリカのガーナ共和国 (以下、ガーナ) で、2009 年 1 月から 2 年間、私は青年海外協力隊エイズ対策として、首都アクラから車で 3 時間のイースタン州クワエビビレム郡役所に配属され、主に若者を対象とした HIV/AIDS 予防啓発活動を、同僚、地域ボランティア、地域関係者 (保健局、教育局、NGO など) と実施した。



啓発のダンス劇を披露する若者グループ

2009 年、ガーナの HIV 感染率 (15-49 歳) は 1.9%、南部アフリカの国々と比較すると低流行国だが、毎年、約 2 万 5 千人が HIV 新規感染し、約 2 万人がエイズにより命を落としている。過去数年間をみると、感染率は減少傾向だが、15-19 歳の感染率は上昇を続けており (National AIDS/

STI Control Programme, 2009)、セックスワーカー、MSM (男性とセックスをする男性)、受刑者といったより高いリスクにさらされている重要な人々に加えて、若者 (国連の定義によると 15-24 歳) の新規感染予防も国の HIV/エイズ対策上の重点項目としてあげられ、各地域・学校で地域関係者が連携し、若者対象の予防啓発活動が進められている。



若者ボランティアによるコンドーム実演

ガーナの学校では、生殖や性感染症について授業で扱われる他、教育局と国際機関連携の HIV/エイズ予防啓発プロジェクトが進められている場合もあり、HIV/エイズを含めた性感染症予防基礎知識を持つ生徒が多いという印象を受ける。しかし、知識はあっても、正しい理解の上、適切な予防行動をとることは容易ではない。例えば、予防にはノーセックスか、コンドームの正しい使用が有効な事実は知っていても、周囲の友人のプレッシャー (ピアプレッシャー) による安易なセックス、コンドーム不使用が多いのが現状である。インターネット普及により情報も氾濫し、予防なし、前戯なしの男性視点のセックスを映す欧米製 AV などにも簡単にアクセスでき、問題になっている。ガーナでは男女の性的関係では男性優位で、特に若い女性は避妊や性感染症予防のためのコンドーム使用を男性に求めることが非常に難しい中、こうした一方的情報が、女性の HIV 感染リスクだけではなく、望まない妊娠や危険な中絶に至らせる可能性を高くさせている。

こうした背景のなか、若者の知識を予防行動に変化させる取り組みがなされている。知識を詰め

込む講義だけではなく、演劇、映像、ダンスなど若者が楽しめる手法を組み合わせたり、サッカー大会や地域イベントなど若者が集まる機会を活用した活動が実施されたりしている。他に、ピアエデュケーション（同じコミュニティや同じ境遇にいる仲間同士での正しい情報の伝達）も積極的に実施されている。この手法の利点は、同じ学校、グループ、年代の友達や仲間が、知識・情報を周囲に伝えるため、より相手が必要とする具体的な情報のやり取り・コミュニケーションが可能で、相手の行動変容に結び付きやすくなることである。私自身の経験でも、講義や大勢対象の啓発手法では出されにくい具体的な質問が数多く出され、それらを一つひとつ説明できるため、若者が行動を振り返り、変わるための一助になっていると感じた。但し、その教育を担うピアエデュケーターの若者が、正しい知識を説明できるように十分なトレーニングを積む必要があり、フォローアップトレーニングも継続実施する必要があるため、保健局、教育局、そして地域リーダーらの理解が欠かせない。継続には連携、予算、時間と、多くの労力がかかるのが課題である。

HIV/エイズへの関心低下の中、こうした活動の実施だけではなく、私は外国人という立場を利用し、活動継続のため、若者ボランティアの声を地域関係者に届け、活動の重要性を理解してもらうように努めた。またボランティアのモチベーション維持・向上のために、継続して声をかけ続け、一緒に活

動してきた。HIV/エイズは医療だけではなく、人権・ジェンダー・宗教など様々な側面からアプローチしなければならない繊細な問題である。ボランティアと関係機関のつながりが、活動を続ける上で、大きな力となることを、改めて認識した2年間だった。

現在、私は財団法人横浜YMCA職員として、横浜市から運営受託された、横浜AIDS市民活動センター運営に携わり、市民へHIV/エイズを含む性感染症の情報提供やボランティア活動支援をしている。毎年8月に開催されている「AIDS文化フォーラム in 横浜」というイベント運営にも関わっている。医療、教育、宗教、NGO、行政機関など様々な分野の運営ボランティアが継続開催を支え、2011年第18回開催の開会式では、改めてフォーラムの“つながり”が新たな活動の輪を生み出していると確認された。

日本では、2007年以降は毎年約1500人のHIV新規感染・エイズ患者（1日4人のペース）が報告されているが、社会の関心は低く、国内問題としてメディアで取り上げられることも減少している。しかし、HIV/エイズは“他人ごと”ではなく、自分自身、パートナーの心と体のために理解し行動に移さなければならない問題である。一人でも多くの方が“自分に関係していること”と考えてもらえるよう、私自身も継続して、協力隊経験を活かしながら、この課題に取り組んでいかなければならないと考えている。

